イラン・イスラーム体制の国民訓育技術

佐藤秀信

はじめに
Ⅰ　バスィージの組織構造
Ⅱ　バスィージ末端の活動事例
Ⅲ　訓育技術の各要素
Ⅳ　訓育技術の確立と限界
おわりに

はじめに

「我々の国民は，若い国民である。この若者たちは覚醒し，イスラームを基礎とする信仰によってその心は揺るぎがない。バスィージは，実に国民の広範な運動である。多くの人々は，バスィージ組織に加わっていないかもしれない。しかし心は，バスィージになるべきである。イランの若者に世論調査したところ，90％以上が国民を護る用意があると述べた。これが，バスィージの本義である」[Daftar¯e ḥefẓ va nashr¯e āsār¯e āyatollāh al-ʻoẓmā Khāmeneʼī 2005a]。

イラン・イスラーム体制の頂点に立つハーメネイー最高指導者がこれほどに評するバスィージとは，革命防衛隊（sepāh¯e pāsdārān¯e enqelāb¯e eslāmī）の被抑圧者動員抵抗部（nīrū¯ye moqāvemat¯e basīj¯e mostaẓʻafīn）を指す（以下，同部をバスィージ，その部員を構成員と称す）。バスィージは，革命後の1979年11月に反ホメイニー勢力の掃討・摘発などを主目的として結成されたが，翌年には革命防衛隊の傘下に入った。イラン・イラク戦争期（1980～88年）には都市・地方社会末端まで浸透し，大量の兵力を調達する戦時動員組織へと成長した［桜井 2001, 41］。戦後には国民管理組織としての性格を徐々に強め，2003年以降は大量の選挙動員を実現し，アフマディーネジャード大統領などの新保守派（now moḥāfeẓekārān）が政治的に台頭する後ろ盾となった［佐藤 2008b］。2007年末には，総人口の約7000万人に対し，総構成員数を1200万人以上に拡大している［*Ṣobḥ¯e ṣādeq* 2007i］。もはやイランの政治と社会を観察する上で，バスィージを無視することはできないといってよい。

ところが，これまでの関連研究は，バスィージの治安・軍事活動や政治動員に関心が偏り，バスィージの全体像，とりわけ国民管理の実態を解明していない(注1)。そこで筆者は，ここ数年にわたりバスィージの法制度的側面と史的側面に関する論考を発表する中で，戦後の非軍事活動の拡大，および国家権力に対する従属性と自律性の並存という組織特徴を指摘してきた［佐藤 2007; 2008b］。その過程で，国家権力がバスィージを経路として社会の隅々へ浸透するミクロな現状を検証すべきとの課題が浮かび上がった。

ただし，関連の現地調査が困難であり，また軍関係の実態を客観的に外部へ発信できるメディアが存在しないなど，かかる現状が正確にうかがえる一次資料は存在しない。そのため筆者は，それに準じる資料として，軍によるプロパガンダ媒体の典型と言える，革命防衛隊最高指導者代表部政治局発行の週刊誌『真実の朝（*Ṣobḥ-e ṣādeq*）』のバスィージ関連記事群に注目した。これらの記事群は，バスィージの諸活動に関して詳細かつ豊富な情報を発信しており，国家権力が国民に働きかける技術の微細な分析を可能とする。

本稿は，『真実の朝』の記事分析(注2)を通じ，バスィージ組織末端の活動内容から看取される国民訓育の技術的側面の解明に主目的を置く。その上で，構成員や国民がかかる技術を受容する上での効果と限界を，可能な限り浮き上がらせてみたい。以下では，第Ⅰ節でバスィージの組織構造を概説し，第Ⅱ節でバスィージの末端部分である基地の具体的な活動事例を確認した上で，第Ⅲ・Ⅳ節で末端における訓育技術を詳しく分析する。

Ⅰ　バスィージの組織構造

本節では訓育技術を検討する前に，イランの軍，およびバスィージの組織構造を概説する。イランの軍は，国軍と革命防衛隊の2軍，あるいは治安維持軍（警察）を加えた3軍によって構成される。全軍統合参謀本部がこれら軍をまとめ上げ，統帥権を有する最高指導者が全軍最高司令官として軍の頂点にいる。行政府内の国防軍需省は軍需品の開発・調達を担うが，行政府の長である大統領は軍の命令系統に関与しない。国軍と革命防衛隊は共に，参謀本部と陸海空の各軍，情報部門，および後述するとおりウラマーが主体の最高指導者代表部（namāyandegī-ye valī-ye faqīh）と思想・政治局（edāre-ye ʻaqīdatī-siyāsī）を有する。革命防衛隊が国軍と決定的に異なるのは，近年米国から名指しで批判されている諜報・工作部門のゴドス部隊（sepāh-e qods），および動員部門のバスィージを有している点にある。

本稿の議論において重要となるバスィージの組織構造上の特徴は，以下の2点が指摘できる。第1の特徴は，管轄地域が行政区分と一定に対応し末端拠点は地域社会に置かれる「地域系列」と，管轄範囲がある程度は行政区分と対応しつつも末端拠点は学校や職場などに置かれる「専門系列」の二つが，いずれも垂直型のハイアラーキーを形成しつつ，次節以降で後述するように共に社会に関与する水平型の協力関係をも形成する点である（なお「地域系列」と「専門系列」は筆者の造語）。「地域系列」のハイアラーキーは，首都テヘランの総本部，州（ostān）レベルの地域（manṭaqe）本部，県（shahrestān）レベルの行政区域（nāḥīye）本部，郡（bakhsh）や市（shahr）レベルの区域（ḥowze）本部，生活圏の地域社会（maḥalle）レベルの基地（pāyegāh）によって形成される(注3)。他方「専門系列」も，首都テヘランの本部，州・郡レベルの中間管理部局，各末端とのハイアラーキーを形成するが，規模や組織特性によって州以下の構造は異なる。「専門系列」には，後述の小中高生バスィージをはじめ，有職者・自営業［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2004g］，大学生［Sāzmān-e basīj-e dāneshjūʻī 2003; *Ṣobḥ-e ṣādeq* 2003c］，大学教員［Ṣāneʻī 2008; *Ṣobḥ-e ṣādeq* 2003e］，女性［Ḥasanpūr 2006; *Ṣobḥ-e ṣādeq* 2005d;

2007d］，部族［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2007g］，ウラマー［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2003j; 2005b; 2007k］，医師［Yūrdkhānī 2007］，文化人［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2007b］，高度技術者［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2005g］など，多様な組織が存在する(注4)。構成員はすべて「地域系列」に属するが，バスィージ拠点のある学校・職場に所属する場合や本人の希望がある場合に，「専門系列」の構成員となり得る。したがって構成員は，条件が合えばいくつもの「専門系列」組織を兼務することになる。例えば1人の若い女性が，「地域系列」の基地構成員でありつつ，「専門系列」の学生バスィージ，女性バスィージ，文化人バスィージの構成員を兼ねることも可能である。

第2の特徴は，「地域系列」と「専門系列」のいずれにも，軍人とウラマーの二つの命令系統が併存する点である。軍人の系統は，各拠点に所属する構成員の実務管理を担う。軍人系統のトップは革命防衛隊総司令官に次ぐレベルのバスィージ総司令官が務め，それ以下には「地域系列」と「専門系列」の各拠点に司令官が配置される。他方ウラマーの系統は，現体制が規定するイスラーム的規範が順守されているか，各拠点にて監督する役割を担う。ウラマー系統のトップは革命防衛隊総本部の最高指導者名代が務め，以下には同代表部および思想・政治局を軸として，各拠点にウラマーが配置される。この軍人とウラマーの二つの命令系統の協力体制が，各拠点運営の基本となっている［佐藤 2008b; *Ṣobḥ-e ṣādeq* 2003h; 2003i; 2006b; 2006g］。

Ⅱ　バスィージ末端の活動事例

本節では，「地域系列」と「専門系列」双方の末端基地の概要を示した上で，『真実の朝』に掲載されている基地の具体的な活動事例を確認する。「地域系列」末端の基地では，軍人系統からは基地が管轄する地域社会出身の構成員が司令官として，またウラマー系統からは地域モスク付きの金曜礼拝導師や上位部局派遣のウラマーが監督者として，互いに協力しながら基地を運営する。モスクに併設されている基地の場合，金曜礼拝導師と住民から構成されるモスク運営団体が，基地司令官とともに施設を管理する。モスクの金曜礼拝導師は，最高指導者直属の全国金曜礼拝導師政策決定評議会議長によって任命され，最高指導者に任命される州金曜礼拝導師の指導下にある。金曜礼拝導師は，同評議会の政策指針に沿って，住民に対して時事に関する説教や日々の指導を実施する。また，基地施設がモスクに付随していない場合でも，最高指導者代表部や思想・政治局から派遣されるウラマーが基地運営に関与することが義務づけられている(注5)。

「地域系列」の基地内は，縦軸の等級（daraje），横軸の班（gorūh）によって編制される。バスィージの等級は，下位から通常構成員（basījī-ye ʿādī），活発構成員（basījī-ye faʿʿāl），特別構成員（basījī-ye vīzhe）と三つに区分され，基地の司令官は特別構成員，班の司令官は活発構成員と法的に定められている(注6)。全構成員中で1％程度とみられる特別構成員は，革命防衛隊の正規職員と同じ待遇の常勤職として固定給が支給され管理職に就くが，同じく3割弱の活発構成員と7割程度の通常構成員は，原則として無給で組織の下部を構成する(注7)。通常構成員になるには「中学生以上，憲法とイスラーム革命の目標を信奉する者」の法的要件を満たす必要があ

るが，実際には小中高生が希望すればほぼ入隊は可能とみられる。

「地域系列」の基地の構成員数は，管轄地域の社会・人口条件によるものの，平均的には400人程度である(注8)。基地内で分かれる班は，概ね数十人程度で構成され，各班には通常構成員と活発構成員が適度に配分される。以下，『真実の朝』に掲載された「地域系列」の一基地事例を要約する。

「シーラーズ市内のサアディー廟に近い，サアディー住宅団地の金曜モスクに併設されているアルシー（‘arshī）基地。全構成員数は750人，うち500人が活発構成員である。この地区は労働者階級が多く住む。5ヘクタールの敷地に，文化教室やサッカー教室，さらには貧困家庭300世帯を支援するためのコンプレックスを建設。基地の構成員による文化・スポーツ評議会がコンプレックスを運営し，シーラーズ市内すべての構成員が利用することができる。市役所と市議会は芝生への水撒きのため，深井戸掘削や外壁建設に5億8000万リヤールもの費用を拠出してくれた。さまざまな年齢層から成るサッカー・チームは40あり，メンバーには非構成員も含まれるが，運営は基地が主導している。いくつかのチームは，州や全国のアマチュア競技会で上位に入っている。貧困家庭子息のために，昨年（2003/4年）からサッカー教室を設立し，現在は8～15歳の少年300人が週3回の教室に参加している。教室開講の前には，イスラーム倫理（akhlāq）・作法について20分間の事前講義がある。18～24歳の300人から構成される宗教団（hey'at¯e mazhabī）が文化活動の中心となり，各分野の講師による毎週水曜日の講話会など，さまざまなプログラムを実施する。基地が運営する若者クラブ（kānūn¯e javānān¯e basīj）は，6台のコンピューターを有し，うち5台は教育専用である。基地の構成員有志は，モスクとモスク運営団体に属する慈善団体を立ち上げ，貧困家庭300世帯に対し月10万～40万リヤール，さらに穀類，肉，衣服などを支給する。基地は，モスク運営団体の支援を得て，イラン北東部マシュハド中心街に2～3人用9部屋の宿泊設備が完備されている5階建てホセイニーイェ（筆者注：下記タアズィーイェなどを催す建物・場所）を建設，住宅団地の家族はマシュハド（筆者注：シーア派12イマーム派の巡礼地）へ旅行する際に特別割引を受けてホセイニーイェを利用できる。基地の若者のみで構成されるタアズィーイェ（筆者注：第3代イマーム・ホセインとその一行の殉教・受難劇）の班はシーラーズ市内で多くの公演を催して人気を博しており，昨年のイスラーム太陰暦モハッラム月とサファル月（2004年2～4月）には，ファールス州の地方テレビ番組に10時間以上も出演した。文化会館を建設するため，モスク前にある40億リヤールの土地1350平方メートルを取得。また，シーラーズ金曜礼拝導師の監督下にあり広大な土地を所有する団体『余暇の農業』から取得した2700平方メートルの土地に文化キャンプ施設を建設する予定。基地に割り当てられる夏季キャンプ『約束のプロジェクト（ṭarḥ¯e mīsāq）』用の予算は極めて限られており，昨年（2003/4年）の割当予算は200万リヤールであったところ，実費は1060万リヤールであった」[*Ṣobḥ¯e ṣādeq* 2004c]。

次に，「専門系列」の小中高生バスィージ（basīj¯e dānesh¯āmūzī）の一基地事例を要約する。若者を中心とするバスィージでは，小中高生バスィージが「専門系列」の最大組織である。現

在，イラン国内の小中高生数は1500万人程度とみられるが，2006年12月時点の小中高生バスィージの構成員総数は430万人となっている［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2006h］。すなわち，小中高生の4人に1人が構成員，また全構成員の5人に2人が小中高生との計算になる。彼らを所管する小中高生バスィージ機構（sāzmān-e basīj-e dānesh-āmūzī）は，教育省，革命防衛隊，最高指導者府の3機関によって監督され，中央本部，州支部，そして各学校を末端とする組織構造にある(注9)。「地域系列」同様，各学校に置かれる基地が，小中高生バスィージの学内管理を担う［佐藤 2007, 46-47］。

「ギーラーン州の州都ラシュトにある非営利のダーネシュヤール男子高校のシャヒード・アムラーキー（shahīd amrākī）基地(注10)。基地は2000/1年に設立され，全生徒数185人中，構成員数は181人である。非営利学校のバスィージ組織は一般に活発でなく，政府の財政支援もないが，この高校の生徒は少ない資本で大きな成果を挙げている。構成員は互いに協力して，学校の中庭に基地を作った。構成員の1人は，国立大学共通入学試験（konkūr）で第5位に入った。文化活動としては，クルアーンとコンピューターの教室，補講，州内外でのキャンプ（ordūgāh），工場，農業大学，天文協会などへの視察，壁新聞の発行，『殉教者（筆者注：イラン・イラク戦争戦死者）』墓地の参詣，金曜礼拝参列などがある。州内の『青少年警察』配備は，当基地が発案したものである。176人の構成員が，基地の運動部に属している。このうち22人が，空手やレスリングなどの全国競技会で良い成績を収めた。基地から75人の構成員が研究コンテストに出場し，1人が全国大会で，5人が州大会で優秀な成績を収めた。国立大学共通入学試験，クルアーンや音楽関連のコンテストで上位に入った者もいる。若者の「イスラーム化，教育，運動（tahzīb, taḥsīl va varzesh）」という最高指導者の指示に鑑み，当基地は環境を整え，すべての活動を集団で実施している。祭りの際には，構成員が学校の装飾や関連活動を実施し，アーシューラー（筆者注：シーア派最大の宗教行事）の際には服喪集団を組織して，街を練り歩く」［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2006f］。

Ⅲ　訓育技術の各要素

前節で述べたようにアルシー基地は活発構成員の割合が高く，シャヒード・アムラーキー基地は生徒のほとんどが構成員であるなど，いずれも全国的に見て特に優秀な基地であることが推測できる。『真実の朝』に掲載される他の基地事例もほぼ似通っており，これらは概ね「模範基地（pāyegāh-e nemūne/osve）」と称され，バスィージの社会浸透が強い都市部やその郊外の庶民区域に集中する(注11)。アルシー基地は国内第6位の人口120万強を抱える大都市シーラーズの新興労働者区域に，シャヒード・アムラーキー基地は人口50万強のラシュト市に位置する。そして，いずれの基地も学業，スポーツ，社会・福祉活動，イスラーム関連活動に力を入れ，地域社会や公的機関と関係を有している。

シャヒード・アムラーキー基地の事例のとおり，ハーメネイー最高指導者は，若者が進歩するための三大要素として，「イスラーム化，教育，運動」を掲げている。このうち「イスラーム化」には，家族や地域社会を大切にする倫理性の向上も含まれる［Daftar-e ḥefẓ va nashr-e

āsār¯e āyatollāh al-ʻoẓmā Khāmeneʼī 2007]。本節では，前節で取り上げた両基地を，国家にとって模範的な基地モデルと捉え，『真実の朝』掲載の関連情報を付け加えつつ，基地の活動に用いられる訓育技術を詳しく分析する。

1．学業，スポーツ教室

末端での学習・スポーツの場は，一方で基地が自発的に設置，あるいは既存の文教施設を利用した簡素な教室，他方で上位部局の支援によって設備が整えられたクラブなどのタイプに分かれる(注12)。前者の場合，構成員によって自主的に運営される。

基地の学習教室は，一般に学習塾の機能を有し，公教育科目全般をカバーする。大学進学希望者は，国立大学共通入学試験にて上位の成績を得て有名大学へ進学することを目標とし，基地は先輩構成員などの協力を得ながら積極的に彼らを後援する。科目の中でも，自然科学と後述のイスラーム関連学は，重視される。国立大学共通入学試験に加え，数学，物理，化学，生物，情報などの科学オリンピック出場，将来への具体的な職能技術獲得が目標に置かれる。バスィージでは，バスィージ協力財団の傘下であるイスラーム戦士科学・教育サービス機構が，組織内の科学オリンピックや国立大学共通入学試験の模試を主催する。科学オリンピックの国内大会にて入賞する少年構成員は高く評価され，国際大会出場となれば大学進学に有利な条件が与えられる［Moʼassese¯ye khadamāt¯e ʻelmī¯āmūzeshī¯ye razmandegān¯e eslāmī 2008; *Ṣobḥ¯e ṣādeq* 2003a; 2005f］(注13)。このような国家の奨励策は，基地の学習塾機能を補強し，構成員の学習意欲を高める効果を生み出す。

基地が運営するスポーツ教室では，サッカー，柔道，空手，テコンドーなどが盛んであり，構成員以外にも利用が認められるケースが少なくない。スポーツ教室は，地域住民に自己鍛錬・娯楽としての運動機会を提供しつつ，バスィージ入隊の誘因にもなり得る。スポーツ教室で修練する構成員は国内外の競技会へも積極的に参加し，競技活性化に貢献する。そのため，バスィージと各スポーツ団体との親和性は高い(注14)。有名スポーツ選手にも構成員は少なくなく，空手世界選手権銀メダリストや柔道世界選手権金メダリストである構成員の活躍は，基地で修練する若者の目標となり得る［*Ṣobḥ¯e ṣādeq* 2002; 2004f］。

2．社会・福祉活動

基地が管轄する地域社会における社会・福祉活動は，貧困家庭支援，治安維持，宗教行事が前節の事例にて確認された。他の基地事例では，住居手配，無利子貸付（カルド・ハサン）事業，医師構成員による無料診療，医療費割引，医薬品の宅配，結婚斡旋，結婚式の運営，小旅行企画などが取り上げられている。

これら社会・福祉活動の一部は，各種バスィージ関連法によって，公的支援体制が整備されている。例えば無利子貸付事業，医療，住居手配，教育，生活物資供与は，バスィージ協力財団基本法（asāsnāme¯ye bonyād¯e taʻāvon¯e basīj）を根拠にバスィージ協力財団により運営される。無利子貸付事業は，同法に基づき設定されたバスィージ無利子貸付基金（ṣandūq¯e qarẓolḥasane¯ye basījīyān）が原資となる［Manṣūr 2003/4, 388¯393; Shīrāzīyān 2002a; 2002b; *Ṣobḥ¯e ṣādeq* 2003d］(注15)。さらに「専門系列」の医師

バスィージや開発バスィージなど社会・福祉分野の「専門系列」が，「地域系列」の各レベルと協同で社会・福祉活動に従事することも少なくない。

このように法・資金・組織支援体制が充実するものの，社会・福祉活動の中核となる人的資源は，地域社会の住人でありつつ個別事情をよく知る構成員が担う。貸付事業や住居手配は中央・地方行政機関も所管するが，在宅医療や貧困家庭支援というようなきめ細やかさが要求される分野は，人的資源の豊富なバスィージ末端の能力が活きる。ここには，基地が立地する社会条件にきめ細かく対応するために，バスィージ上位部局の指示ではなく，基地の主導で個々の活動企画が発案される必然が認められる。

３．非日常活動

学業・スポーツと社会・福祉活動が日々の基地運営の中核とすれば，事例で確認されたキャンプをはじめとする以下の諸活動は，休日や緊急時などの非日常的な活動に分類できる。

なかでもキャンプは重視され，特に夏休みの時期は，多くの若者が一定期間合宿入りする夏季キャンプが実施される。数ある夏季キャンプ企画のうち，最大規模である「約束のプロジェクト」は，1990年代半ばからバスィージへの若者吸収を目的として，学習，視察，運動などのプログラムが企画されてきた。プログラムは，いかに今時の若者に興味を持ってもらえるかを念頭に編成される。また小中高生バスィージ機構は，夏季休暇中に「文化・運動祭典（jashnvāre¯ye farhangī¯varzeshī）」と称して，学習と運動のプログラムを組んだ合宿，また球技や格闘技の競技会を催す。この他にも，大学生を対象とするキャンプ，農業労働を中心とするキャンプなど，多種のキャンプ企画がある［Ṣāneʻī 2005; 2006b; *Ṣobḥ¯e ṣādeq* 2004e; 2006d; 2006e; 2007c］。

キャンプ以外の非日常活動としては，バスィージ週間（hafte¯ye basīj），小中高生バスィージ週間（hafte¯ye basīj¯e dānesh¯āmūzī），革命記念期間（dehe¯ye fajr），エルサレムの日（rūz¯e qods）などの国家年中行事，核開発問題や反米・反イスラエルをテーマにする官製抗議集会，南部戦争地帯への見学旅行「輝きの旅人（rāhiyān¯e nūr）」，軍事演習(注16)，地震・洪水などの大規模自然災害時の緊急支援，が挙げられる。いずれも基地レベルの判断で実施されることはなく，区域本部以上の上位部局が，当該分野の専門機関と緊密に連携しつつ，企画・調整業務を担う。例えば国家年中行事と官製抗議集会は，イスラーム宣伝調整評議会(注17)が統括し，州レベルでは同評議会の各州支部と評議会メンバーである革命防衛隊がバスィージ地域本部に動員を依頼し，地域本部は基地までのラインを通じて，構成員と地域住民を動員する。同様に，軍事演習であれば革命防衛隊，災害支援であれば保健省や赤新月社などと連携する。

４．イスラーム的要素の多角的浸透

事例によれば，クルアーンの学習教室，アーシューラー，タアズィーイェというようなイスラーム固有の活動のほか，スポーツ教室でのイスラーム倫理の小講義，住民の滞在利用のため巡礼地にホセイニーイェを建設，合宿キャンプでのイスラーム関連の講義など，さまざまな活動へイスラーム的要素が組み込まれている。イスラーム主義を国是とするイラン現体制がイス

ラームとバスィージの関係をどう定義しているかは，『真実の朝』の用語解説「バスィージ」において，明確に示されている。

「イスラーム社会において，バスィージは，社会の基本的かつ重大な要求に応える人々から構成される組織である。イスラーム政治哲学において，バスィージは，イスラーム社会における統治と人々の関係，つまり人々の参加と協力に留意しつつ，イスラームの指示を実行，社会を発展，内外のさまざまな危機・脅威と対峙する存在である。……バスィージ創設の基本的な目標は，イスラーム革命とその成果を後押しすることにある」[*Ṣobḥ-e sādeq* 2007g]。

バスィージは，イスラーム社会を発展させるために，人々の協力を得なければならない。ここではバスィージが，革命の大義の下に国家が規定するイスラームを推進しつつ，人々の生活に根づいたイスラームをも尊重する必要が説かれている。事例からは，住民のニーズがある活動に対し，イスラーム的要素が無理なく組み込まれていることがわかる。国家は，そうして人々の自発的なイスラーム性を穏当に喚起する中で，日常生活の隅々へ権力を浸透させようと目論む。

Ⅳ　訓育技術の確立と限界

「バスィージは，教育，科学，研究，技術に関連する省庁との協力によって，その能力を，国家の開発のために，また若者の余暇時間（owqāt-e farāghat）のために，活用しなければならない［Daftar-e ḥefẓ va nashr-e āsār-e āyatollāh al-ʻoẓmā Khāmeneʼī 2005b］。」

前節で論じたバスィージの訓育技術は，構成員の社会生活の時間と空間を十全に埋め尽くす。小中高生の構成員の場合，社会活動の時間は，平日の学校内と放課後に加え，休日・長期休暇期間もバスィージに専有され得る。また空間的には，生活圏から全国まで構成員が行動する際，どこにでもバスィージの活動網が張りめぐらされている。「地域系列」と「専門系列」の基地は，活動内容を重複させ，反復教育を効率よく実践できる。そして，技術全体を通じて，イスラーム的要素が隅々に浸透する。この時間・空間専有の技術の背景には，上記ハーメネイー発言のとおり，構成員の大半を占める若者に手放しで余暇時間を与えることなく，常に彼らを集団行動の管理下に置きたい国家の意図がある(注18)。

かかる訓育技術の効力が発揮されるか否かは，国家が最上のパトロン，バスィージが国家に対するクライエントでありかつ構成員・住民に対するパトロン，そして構成員・住民がクライエントとなる垂直的な支配関係，すなわち国家によるクライエンタリズムが順調に機能するかの程度によると考えられる。具体的には，国家から生活圏へのベクトルの場合，国家は，バスィージの上位部局を通じて基地へ資金と指導方針を提供，必要時に動員指示を発出する。基地は，指導方針と地域社会の実情に沿って構成員・住民に学業，スポーツ，社会・福祉面でのサービスを提供，構成員はサービスを受ける客体であるとともに，住民へサービスを提供する主体にもなる。

逆に生活圏から国家へのベクトルの場合，住民はバスィージのサービスを裨益するため子弟のバスィージ入隊に肯定的になり，構成員はバスィージの各活動に参加することで自己実現を

果たす。基地は，構成員を拡大・訓育し業績を挙げれば，国家・上位部局から称揚され，またサービスの提供により管轄の地域社会からの信望を高め，サービスの充実に励む動機が生まれる。活動の専門性が高くなると，バスィージ上位部局が当該分野の専門機関に協力を仰ぎ，専門機関はバスィージから多くの動員参加を得る。そして国家は，このようなクライエンタリズムの恩恵を受け，国民の取り込み，構成員の訓育，行政負担の軽減，各専門機関の活発化，大量動員による政治効果など，統治上の利益を享受する。

以上のようにバスィージを介する訓育技術は，理念型としてクライエンタリズムが予定され，実際に理念型に近いケースを生み出す。しかしそれとともに，バスィージ組織末端それぞれの活発度合いが異なる不安定な性質をも内包する。これは事例にもみられたように，構成員・基地が一定の自己裁量権を有し，訓育技術が人々の能動的な自己実現欲求を不可欠な構成要素とするからである。逆に言えば，構成員の自己実現欲求が喚起されなければ，基地の活動は停滞する。事例で取り上げた基地と全国平均との通常構成員と活発構成員の割合を比べると，停滞している基地や不活発な構成員が全国的に少なくないとは容易に推測できる(注19)。

また，クライエンタリズムは，基地の管轄する生活圏の条件によっては，順調に機能しない。前述したとおり，『真実の朝』にて紹介される基地事例は都市部庶民区域に集中するが，これは伝統的な共同体意識が希薄な故に住民が原子化し国家の直接関与を受けやすい新興市街区，あるいは逆に古くからの街区である故に革命体制との親和性が高い伝統市街区から成る。イラン・イラク戦争後の1990年代，ハーメネイー体制は，戦後復興下の新しい社会環境下で小中学生となる1980年代前半生まれのベビーブーマーを構成員として訓育することに傾注した。この時期は全国的に拡大する新興市街区を掌握する基地設置が進められ，戦時動員から社会浸透，治安維持，経済開発へバスィージの機能が重点化された［佐藤 2008b］。したがって国家が介入しやすい都市部庶民区域は，模範的な基地が成立しやすい環境にあった。

これは裏を返せば，例えば現体制と親和性の低い非ペルシア・非12イマーム派のエスニック・マイノリティ地域では，地域社会の高い自立性，12イマーム派以外の宗教・宗派，基本的な行政サービスすら行き渡っていない貧困などの事情により，バスィージが十分に機能し得ないことを示す。また都市部の富裕・中間層区域では，バスィージが提供する庶民層向けのサービスに満足せず，バスィージや地域社会へ参加しないという選択肢が有力となり得る。このようなバスィージをめぐる社会偏差の状況は，2005年の第9期大統領選挙時にバスィージによる大量動員を実現したアフマディーネジャード現大統領が，エスニック・マイノリティ地域と富裕層区の得票では伸び悩んだことからも明らかである［佐藤 2005; 2008a］。

おわりに

本稿の議論によって，以下の状況が明らかになった。バスィージは，「地域系列」と「専門系列」のハイアラーキー，および軍人とウラマーの二つの命令系統を組織構造上の特徴とし，それは末端部分にも反映されている。国家はバ

スィージ末端において，学業，スポーツ，社会・福祉活動，イスラームによる構成員の心身の規範化，バスィージ活動への関係機関の十全関与，構成員の時間・空間の専有という訓育技術を通じ，国民統治の安定を企図している。しかし実際には，訓育技術をめぐるクライエンタリズムが順調に機能しなければ，不活発な基地・構成員が生まれ，訓育技術の効果は全国的に不均等にならざるを得ない。

本稿までの筆者によるバスィージ関連研究を踏まえると，現時点では以下2点の成果と展望を示すことができる。第1の成果は，これまで本格的に研究されてこなかったバスィージの全体像を，法制度，経緯，現状の多角的側面から明らかにしたことである。今後は，各側面で指摘された非軍事活動の拡大，国家に対する従属性と自律性の並存，訓育技術とそれをめぐるクライエンタリズムや全国的な技術効果の不均等などの組織特徴が，現代イランの政治・社会システムにどのような意味を持つのかを考察する必要がある。第2の成果は，先の非軍事活動の拡大と関係するが，バスィージとともに革命防衛隊とはいったい何か，との問いについて考察する材料を提供したことである。米国・イスラエルへの軍事的対抗，核・ミサイル開発，近隣国への浸透などが革命防衛隊の活動として主にメディアで注目されているが，近年の革命防衛隊の最重要戦略は「バスィージ化(basījī shodan)」による隊員，ひいては全国民の精神改革にほかならない。イランをめぐる現今の国際情勢のみならず，イラン・イスラーム体制の将来を見据えるには，革命防衛隊の総体的理解が不可欠と筆者は考えている。

〔付記〕本稿は，2006～2007年にアジア経済研究所で実施された「湾岸・アラビア産油国における社会変容とその政治システムへの影響」研究会の一部成果が盛り込まれている。なお，本稿にて示した筆者見解は，日本国政府，および筆者勤務先の見解一般を表したものではない。

（注1） これは，イラン・イラク戦争期を焦点とするSchahgaldian（1987）やKatzman（1993）に記述されたバスィージに関する認識を，後年の研究がほぼそのまま受容したことに原因があると考えられる。その例として，イランの政治システムに関してはSchirazi（1997），Buchta（2000），また軍事に関してはCordesman（2005）などを参照。

（注2） 本稿では約5年半の記事群を共時的に引用するが，これはハータミー（Moḥammad Khātamī）政権の退潮が顕著となる2002年から今日に至る時期は，バスィージが国民管理組織として全国的な組織網を確立し，末端における活動内容の性格が大きく変わっていないと理解されるためである。

（注3） 例えば人口700万強のテヘラン市の場合，2007年末時点で区域本部数は468，基地数は5325に達する［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2007］。

（注4）「専門系列」の法制度的側面については，佐藤（2007, 46-49）を参照。なお「専門系列」の組織は他にもあるが，本稿ではKhabargozārī-ye basīj（2008）の「バスィージ各階層ニュース（akhbār-e aqshār-e basīj）」に取り上げられる主要な組織を列挙した。

（注5） イスラーム革命防衛隊基本法（asāsnāme-ye sepāh-e pāsdārān-e enqelāb-e eslāmī）第38条によると，革命防衛隊は地域社会のウラマーや公的評議会の協力を得て，地域社会にバスィージ拠点を構築する。また同第40条によると，各バスィージ組織は構成員1人とウラマー1人の監督下で評議会を設け，そのウラマーは最高指導者あるいは名代によって任命される［Majmūʻe-ye qavānīn-e majles-e showrā 1982］。なお，イラン国内には最高指導者代表部や思想・政治局と関係を持たないウラマーも多く，すべてのウラマーがバスィージに関わるわけではない。

（注6） イスラーム革命防衛隊基本法第41～42条，およ

びイスラーム革命防衛隊雇用規則法（qānūn-e moqarrarāt-e estekhdāmī-ye sepāh-e pāsdārān-e enqelāb-e eslāmī）第13条を参照［Majmū'e-ye qavānīn-e majles-e showrā 1982; Manṣūr 2003/4, 289］。

（注7） 2005年7月のサファヴィー（Yaḥyā Raḥīm Ṣafavī）革命防衛隊総司令官発言から推測すると，各等級の人数構成は，通常構成員71％，活動構成員28％，特別構成員1％程度と考えられる［佐藤 2007, 44-45; *Īrān* 2005］。なお通常構成員と活発構成員の原則無給とは，常勤の固定給与体系の対象にならないという意味であり，臨時給はこの限りではない。

（注8） 2003年夏時点の全国基地数が2万3000であるとのバスィージ総司令官による指摘から推計。なお，本文にて後述する模範基地の平均構成員数は，600人とされている［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2003f］。

（注9） 例えばテヘランの場合，小中高校の7割に基地が置かれている［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2007l］。

（注10）非営利学校の状況については，桜井（1996）を参照。なおイランでは，小学校から高校まで男女別学制である。

（注11）アルシー基地とシャヒード・アムラーキー基地以外の事例は，Ṣāne'ī（2006a），*Ṣobḥ-e ṣādeq*（2003b; 2003g; 2004a; 2004b; 2004d; 2005a; 2006c; 2007a; 2007h; 2007j）を参照。

（注12）クラブは，イスラーム革命防衛隊基本法第204条の規定を受けて，バスィージの保護と統一，若者の吸収，余暇時間の質向上を目的に，1992/3年から設置が開始された。設置形態としては，都市に置かれる若者クラブと，モスクに付随するモスク・クラブ（kānūn-e basīj-e masājed）の2種類に大別される。クラブは規模に応じて1～3級に分かれ，全国に12カ所ある1級クラブは映画室，多目的運動室，図書室，学習室，時にプールも備えつけられている［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2005c］。

（注13）2006年12月までに科学オリンピック国内大会でメダルを獲得した構成員は243人，国際大会でメダルを獲得した構成員は49人［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2006h］。

（注14）例えば『真実の朝』毎号のスポーツ面（第16面）の「革命防衛隊とバスィージのスポーツ短文記事（akhbār-e kūtāh-e varzeshī dar sepāh va basīj）」欄や，Khabargozārī-ye basīj（2008）の「運動のバスィージ（basīj-e varzesh）」を参照。

（注15）この他には，治安維持は「バスィージ司法支援法（qānūn-e ḥemāyat-e qaẕā'ī az basīj）」を根拠に司法省，市当局，治安維持軍との協力が，職業訓練や農業などは「イスラーム革命防衛隊雇用規則法第201条内規（āyīn-nāme-ye ejrā'ī-ye māde-ye devīst-o-yekom-e qānūn-e moqarrarāt-e estekhdāmī-ye sepāh-e pāsdārān-e enqelāb-e eslāmī）」によって各省庁の協力義務が定められている［Manṣūr 2003/4, 356-361, 377-381］。

（注16）バスィージの軍事部門としては，男性のアーシューラー大隊（gordān-e 'āshūrā）と女性のザフラー大隊（gordān-e az-zahrā）が1個当たり数百人規模で，2007年時点には約2500個が全国に配置されている［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2004e; 2007f］。

（注17）イスラーム宣伝調整評議会（showrā-ye hamāhangī-ye tablīghāt-e eslāmī）は，革命体制のプロパガンダ行事の統括を目的に，1980年8月にホメイニーの同意を得て設立された。事務局長兼最高指導者名代の監督下，全国金曜礼拝導師政策決定評議会，全軍統合参謀本部，国営放送，殉教者・献身者財団，イスラーム文化・関係庁，革命防衛隊，イスラーム宣伝機構，小中高生イスラーム委員会連合，関係各省など文化・プロパガンダ機関の長が，最高意思決定を行う評議会に参画する［Showrā-ye hamāhangī-ye tablīghāt-e eslāmī 2008］。

（注18）これは，小中高生バスィージ機構が，発明・科学関連の組織化・施設建設，バスィージ思考の普及，小中高生の余暇時間の充足などを，2006/7年の優先目標に掲げていることにも端的に示されている。同機構は，予算の3分の1を占める「地方プロジェクト（ṭarḥ-e velāyat）」など教育プロジェクトに基づき，イスラームと自然科学の学習，スポーツ，関連施設の建設，長期休暇中のキャンプ開催を企画し，そこに予算を重点化する［*Ṣobḥ-e ṣādeq* 2004e; 2005e; 2006a］。

（注19）過去に停滞していた状況を改善した基地事例については，例えば*Ṣobḥ-e ṣādeq*（2007j）を参照。

【文献リスト】

〈日本語文献〉

桜井啓子1996.「イランの教育政策：非営利学校をめぐ

る一考察」『上智アジア学』第14号 145-159.
――― 2001.『現代イラン：神の国の変貌』岩波書店.
佐藤秀信2005.「第9期イラン大統領選挙：革命原理派の権力奪取へ」『中東研究』第489号 53-79.
――― 2007.「イラン・イスラーム共和体制における統治権力と国民：バスィージの実態理解へ向けて」福田安志編『湾岸・アラビア諸国における社会変容と国家・政治：イラン，GCC諸国，イエメン』アジア経済研究所　調査研究報告書 13-61.
――― 2008a.「現代イランの政治と社会：第9期大統領選挙結果に見る中央一地方関係」日本イスラム協会公開講演会　於：東京大学　4月27日.
――― 2008b.「イランにおける社会変容と中央政治システム：バスィージの役割」福田安志編『湾岸・アラビア諸国における社会変容と政治システム：GCC諸国，イラン，イエメン』アジア経済研究所　調査研究報告書 75-109.

〈外国語文献〉

Buchta, Wilfried 2000. *Who Rules Iran?: The Structure of Power in the Islamic Republic*. Washington: The Washington Institute for Near East Policy.
Cordesman, Anthony H. 2005. *Iran's Developing Military Capabilities*. Washington: Center for Strategic and International Studies.
Daftar-e ḥefẓ va nashr-e āṣār-e āyatollāh al-'oẓmā Khāmene'ī（http://www.khamenei.ir/）2005a. "Bayānāt-e rahbar-e mo'aẓẓam-e enqelāb-e eslāmī dar meydān-e ṣobḥgāh-e setād-e nīrū-ye moqāvemat-e basīj." August 24.（2008年7月19日閲覧）
――― 2005b. "Sherkat-e maqām-e mo'aẓẓam-e rahbarī dar marāsem-e neẓāmī-ye rade-hā-ye mokhtalef-e nīrū-ye moqāvemat-e basīj." August 24.（2007年7月25日閲覧）
――― 2007. "Taḥṣīl, tahẕīb-e nafs va varzesh se 'āmel-e aṣlī-ye pīshraft-e javānān ast: dīdār bā anjoman-hā-ye eslāmī-ye dānesh-āmūzān." May 9.（2008年7月19日閲覧）
Ḥasanpūr, Maryam 2006. "Mas'ūl-e basīj-e khāharān-e keshvar e'lām kard: chahār mīlyūn-e khāhar-e basījī dar bīst-o-haft hezār pāyegāh-e moqāvemat." *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 10 July: 5.
Īrān（http://www.iran-newspaper.com/）2005. "Sardār-e ṣafavī: jam'īyat-e basījīyān-e keshvar be pānzdah mīlīyūn nafar mīresad." July 26: 2.（2005年7月26日閲覧）
Katzman, Kenneth 1993. *The Warriors of Islam: Iran's Revolutionary Guard*. Boulder: Westview Press.
Khabargozārī-ye basīj 2008.（http://www.basijnews.com/, 2008年7月19日閲覧）
Majmū'e-ye qavānīn-e majles-e showrā（http://law.majlis.ir/law/）1982. *Asāsnāme-ye sepāh-e pāsdārān-e enqelāb-e eslāmī*.（2008年7月19日閲覧）
Manṣūr, Jahāngīrī 2003/4. *Majmū'e-ye qavānīn va moqarrarāt-e nīrū-hā-ye mosallaḥ-e jomhūrī-ye eslāmī-ye īrān*. Tehrān: Mo'assese-ye enteshārāt-e āgāh.
Mo'assese-ye khadamāt-e 'elmī-āmūzeshī-ye razmandegān-e eslāmī 2008.（http://www.razmandegan.org.ir, 2008年7月19日閲覧）
Ṣāne'ī, Yadāollāh 2005. "Mojrīyān-e barnāme-hā-ye tābestānī-ye basīj dar goft-o-gū bā ṣobḥ-e ṣādeq maṭraḥ kardand: niyāz-hā-ye jeddī-ye ṭarḥ-e mīṣāq." *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 3 October: 5.
――― 2006a. "Pāyegāh-e basīj-e ṣāḥeb-oz-zamān-e shahrak-e ṣanī'-e khānī-ye tehrān ejrā' mīkonad: ṭarḥ az madrese tā dāneshgāh." *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 23 January: 5.
――― 2006b. "Mas'ūl-e sāzmān-e basīj-e sāzandegī-ye keshvar tashrīḥ kard: ṭarḥ-e ordū-hā-ye jahādī va sāzandegī." *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 6 March: 5.
――― 2008. "Doktor-e rūstā-āzād-e mo'āven-e pazhūheshī-ye sāzmān-e basīj-e asātīd: hadaf-e basīj-e asātīd modīrīyat-e pazhūhesh ast." *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 12 May: 5.
Sāzmān-e basīj-e dāneshjū'ī 2003. *Āshenā'ī bā basīj-e dāneshjū'ī*. Tehrān.
Schahgaldian, Nikola B. 1987. *The Iranian Military under the Islamic Republic*. Santa Monica: RAND.
Schirazi, Asghar/John, O'Kane（trans.）1997. *The Constitution of Iran*. London: I.B.Tauris.
Shīrāzīyān, 'Alī 2002a. "Gozāreshī az 'amalkard-e ṣandūq-e qarẕolḥasane-ye basījīyān (avval): āyā mo'assese-ye qarẕolḥasane-ye basījīyān pāsokh-gū-ye niyāz-e basījīyān ast?" *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 23 December:

15.

——— 2002b. “Gozāresh-e kārshenāsī-ye ṣobḥ-e ṣādeq az ‘amalkard-e mo’assese-ye qarẓolḥasane-ye basījīyān (dovvom): motavallīyān-e omūr-e eqteṣādī-ye keshvar bāyestī īn mo’assese rā yārī va ḥemāyat konand.” *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 30 December: 15.

Showrā-ye hamāhangī-ye tablīghāt-e eslāmī 2008. （http://www.fajr.ir, 2008年7月19日閲覧）

Ṣobḥ-e ṣādeq（http://www.sobhesadegh.ir/, 同誌記事はすべて2008年7月19日閲覧可能）2002. “Nemūne-hā-ye basīj: movaffaqīyat-hā-yam marhūn-e towfīq-e elahī ast.” 9 December: 15.

——— 2003a. “Dar moṣāḥebe-ye ekhteṣāṣī-ye ṣobḥ-e ṣādeq bā sardār-e āzādī maṭraḥ shod: haft sāl, haft dowre-ye olampīyād-hā-ye ‘elmī-ye basīj va devīst-o-shānzdah hezār sherkat konande.” 6 January: 15.

——— 2003b. “Nemūne-hā-ye basīj: pāyegāh-e moqāvemat-e basīj-e masjed-e qabā dar eṣfahān.” 17 February: 15.

——— 2003c. “Ra’īs-e sāzmān-e basīj-e dāneshjū’ī: devīst-o-navad-o-se hezār dāneshjū’ī-ye basījī dar do hezār dāneshgāh-e īrān fa‘‘ālīyat mīkonand.” 9 June: 5.

——— 2003d. “Sardār-e doktor-e aḥmad shafī‘zāde-ye modīr-e ‘āmel-e bonyād-e ta‘āvon-e basīj: devīst hezār jahīzīye be javānān-e basījī vāgozār mīshavad,” 16 June: 5.

——— 2003e. “Mas’ūl-e markaz-e basīj-e asātīd-e keshvar: panj hezār-e ostād-e dāneshgāh, motaqāẕī-ye ‘oẕvīyat dar basīj-and.” 30 June: 5.

——— 2003f. “Pāyegāh-hā-ye basīj-e nemūne-ye keshvarī mo‘arrefī shodand.” 4 August: 5.

——— 2003g. “Nemūne-hā: pāyegāh-hā-ye nemūne-ye basīj.” 25 August: 5.

——— 2003h. “Mas’ūl-e mo‘āvenat-e āmūzesh-hā-ye ‘aqīdatī-o-siyāsī va mo‘āven-e hamāhang konande-ye namāyandegī-ye valī-ye faqīh dar nīrū-ye moqāvemat-e basīj: mā’mūrīyat-e aṣlī-ye mā erteqā-ye saṭḥ-e bīnesh va dānesh-e ‘aqīdatī-siyāsī-ye nīrū-hā-ye basījī ast.” 27 October: 5.

——— 2003i. “Ḥojjat-ol-eslām-e moṣleḥī barnāme-ye namāyandegī-ye valī-ye faqīh barāye ertebāṭ-e harche bīshtar bā basījīyān rā tashrīḥ kard: rāh-andāzī-ye sāyet-e īnternetī-ye siyāsī va eqteṣādī.” 24 November: 5.

——— 2003j. “Dar rāstā-ye afzāyesh-e tavānmandī-hā-ye ‘elmī-ye basīj-e ṭollāb tashkīl shod: haste-hā-ye ‘elmī dar sīzdah ostān.” 8 December: 5.

——— 2004a. “Farmānde-ye manṭaqe-ye moqāvemat-e basīj-e ardabīl dar goft-o-gū bā ṣobḥ-e ṣādeq e‘lām kard: hezār ṭarḥ dar hezār pāyegāh-e moqāvemat.” 12 April: 5.

——— 2004b. “Farmānde-ye pāyegāh-e moqāvemat-e basīj-e abūẕarr-e arāk tashrīḥ kard: eqdāmī-ye now dar basīj-e arāk.” 12 July: 5.

——— 2004c. “Farmānde-ye pāyegāh-e moqāvemat-e shahīd ‘arshī-ye shīrāz az fa‘‘ālīyat-hā-ye basījīyān mīgūyad: erā’e-ye khadamāt-e ebtekārī be mardom.” 2 August: 5.

——— 2004d. “Chahārdah ṭarḥ-e ebtekārī dar yek pāyegāh-e basīj.” 13 September: 5.

——— 2004e. “Negāhī-ye goẕarā be basīj dar barnāme-ye panj sāle-ye sevvom.” 22 November: 5.

——— 2004f. “Basīj az negāh-e ‘alāqemandān: dūst dāram basījī bāsham.” 29 November: 5.

——— 2004g. “Ra’īs-e sāzmān-e basīj-e edārī-kārgarī va aṣnāf: qānūn-e basīj-e aṣnāf niyāz be eṣlāḥ dārad.” 27 December: 5.

——— 2005a. “Pāyegāh-e osve: kūdakān dar ṭarḥ-e golvāzhe-hā-ye āsemānī-ye qor’ān mīāmūzand.”30 May: 5.

——— 2005b. “Mas’ūl-e sāzmān-e basīj-e ṭollāb dar goft-o-gū-ye ekhteṣāṣī bā ṣobḥ-e ṣādeq maṭraḥ kard: sāzmāndehī-ye panjāh-o-yek hezār ṭalabe-ye basījī dar hashtṣad-o-bīst-o-shesh pāyegāh-e moqāvemat.” 13 June: 5.

——— 2005c. “Mas’ūl-e kānūn-hā-ye farhangī-varzeshī-ye nīrū-ye moqāvemat-e basīj dar goft-o-gū-ye ekhteṣāṣī bā ṣobḥ-e ṣādeq: dar barnāme-ye chahārom-e towse‘e-ye ṣad-o-panjāh kānūn ījād mīshavad.” 18 July: 5.

——— 2005d. “Mas’ūl-e sāzmān-e basīj-e khāharān-e nīrū-ye moqāvemat-e basīj e‘lām kard: jashn-e sarāsarī-ye mīlād-e kowṯar bā ḥoẕūr-e do mīlyūn khāhar-e basījī.” 26 July: 5.

——— 2005e. “Ra’īs-e sāzmān-e basīj-e dānesh-āmūzī-ye keshvar: yek sevvom-e būdje-ye īn sāzmān ṣarf-e dowre-ye takmīlī-ye ṭarḥ-e velāyat mīshavad.” 5 September: 5.

——— 2005f. “Ra’īs-e sāzmān-e basīj-e dānesh-āmūzī-ye keshvar: sahm-e basīj az olampīyād-hā-ye jahānī shaṣt dar ṣad ast.” 24 October : 5.

——— 2005g. “Ra’īs-e sāzmān-e basīj-e mohandesīn-e keshvar e‘lām kard: sāzmāndehī-ye bīst hezār-e mohandes-e basījī.” 19 December: 5.

——— 2006a. “E‘zām-e do hezār dānesh-āmūz-e basījī be ḥajj-e ‘omre.” 3 April: 5.

——— 2006b. “Mo‘āven-e āmūzesh-e ‘āqīdatī-sīyāsī-ye basīj barnāme-hā-ye sāl-e hezār-o-sīṣad-o-hashtād-o-panj rā tashrīḥ kard: pāsokh be shobhāt-e dīnī va e‘teqādī meḥvarītarīn kār-e morabbīyān.” 1 May: 5.

——— 2006c. “Gozāreshī az yek pāyegāh-e osve-ye keshvarī: maḥrūmīyat māne‘-e movaffaqīyat nemīshavad.” 5 June: 5.

——— 2006d. “Sardār-e ḥejāzī barnāme-hā-ye basīj dar tābestān-e emsāl rā tashrīḥ kard: panj hezār ordū-ye sāzandegī-ye hejrat.” 12 June: 5.

——— 2006e. “Gozāreshī az marāsem-e eftetāḥ-e ordūgāh-e shohadā-ye haftom-e tīr-e rāmsar: sheshomīn ordūgāh-e keshvarī-ye basīj.” 3 July: 5.

——— 2006f. “Nemūne-hā: osve-ye basīj-e dānesh-āmūzī.” 21 August: 5.

——— 2006g. “Mas’ūl-e namāyandegī-ye valī-ye faqīh dar nīrū-ye moqāvemat-e basīj dar goft-o-gū bā ṣobḥ-e ṣādeq: owlavīyat-e mā taqvīyat-e basīj-e ṭollāb ast.” 27 November: 5.

——— 2006h. “Gozāreshī az mīzgard-e basīj-e dānesh-āmūzī: noqṭe-ye vorūd-e artesh-e bīst mīlyūnī.” 4 December: 5.

——— 2007a. “Farmānde-ye pāyegāh-e moqāvemat-e osve-ye keshvarī maṭraḥ kard: āmūzesh-e mostamer va neẓārat-e daqīq-e do khāste-ye basīj.” 12 February: 5.

——— 2007b. “Dar goft-o-gū bā farhangīyān-e basījī ‘onvān shod: jāyegāh-e nokhbegān dar taṣmīm-gīrī-hā-ye basīj.” 30 April: 5.

——— 2007c. “Hamzamān bā ta‘ṭīlāt-e tābestān āghāz mīshavad: hejrat barāye sāzandegī.” 25 June:5.

——— 2007d. “Mas’ūl-e basīj-e khāharān-e keshvar e‘lām kard: ejtemā‘-e do mīlyūnī-ye khāharān-e basījī barāye defā‘ az ḥoqūq-e haste’ī.” 2 July: 5.

——— 2007e. “Farmānde-ye nāḥīye-ye moqāvemat-e basīj-e ‘ashāyer-e ostān-e chahār maḥāl va bakhtīyārī: basīj-e ‘ashāyerī ẕāmen-e barqarārī-ye amnīyat-e pāyedār dar manṭaqe ast.” 20 August: 5.

——— 2007f. “Dar goft-o-gū bā chand tan az farmāndehān-e gordān-hā-ye ‘āshūrā’ī-ye nemūne-ye keshvarī maṭraḥ shod: tahdīd-hā tah keshīde ast!” 1 October: 5.

——— 2007g. “Eṣṭelāḥāt: basīj.” 12 November: 12.

——— 2007h. “Nemūne-hā: gozāreshī az yek pāyegāh-e osve-ye keshvarī.” 19 November: 5.

——— 2007i. “Bā ḥoẕūr-e farmānde-ye mo‘aẓẓam-e koll-e qovā ejrā mīshavad: namāyesh-e eqtedār bīsh az hasht mīlyūn-e basījī dar sarāsar-e keshvar.” 26 November: 1.

——— 2007j. “Nemūne-hā: farmānde-ye pāyegāh-e nemūne-ye keshvarī.” 10 December: 5.

——— 2007k. “Ra’īs-e sāzmān-e basīj-e ṭollāb dar goft-o-gū bā ṣobḥ-e ṣādeq: basīj-e ṭollāb motavallī-ye vāḥed mīkhāhad.” 10 December: 5.

——— 2007l. “Farmānde-ye manṭaqe-ye moqāvemat-e basīj-e tehrān-e bozorg: basīj āmadegī dārad barāye erteqā-ye zendegī-ye shahrī vāred-e ‘arṣe shavad.” 17 December: 5.

Yūrdkhānī, Mehdī 2007. “Gozāreshī az e‘zām-e tīm-hā-ye basīj-e jāme‘e-ye pezeshkī be manṭaqe-ye marzī va maḥrūm-e bīrjand: kasī rā yārā-ye bāz-gasht nīst!” *Ṣobḥ-e ṣādeq*, 6 August : 5.

（さとう　ひでのぶ／法務省法務事務官）